

信濃教育

巻頭言

職人技

若い人たちは、「太陽にほえろ！」という刑事ドラマをもう知らないだろう。昭和四十七年（一九七二年）から十五年近くの間、金曜日夜八時に放送された、警視庁七曲警察署捜査第一係藤堂係長（石原裕次郎）を中心とした刑事たちの物語である。数々の若い人気俳優が登場する中、いぶし銀のような存在の山村警部補は、「落としの山さん」と呼ばれる捜査のプロである。山さんが持っている技術は、経験が培った職人技である。

私が教員になった頃、どこの学校にも山さんのような先生がいた。私の前では心閉ざし、かたくなに口を開こうとしない生徒も、その先生はどこかに連れて行って話を聞き出してくる。何をしているんだらうか、まるでマジックである。

「武田さん、子どもがすべてを正直に話したら、それで生徒指導はほぼ終わり。」

「二人一緒に話を聞こうとしたってだめだ。一人ずつ話を聞いて、それで話をつき合わせるんだ。」

太陽にほえろの山さんが、若い刑事に教えているような感じだ。その教えは私の教員生活のバイブルとなった。その先生のようにうまくは行かないが、近づこうと努力した。

山さんのような先生の教えが、学校現場で受け継がれていないのでは、そう感じることも多々あった。しっかりと子ども話を聞かないうちに、謝罪をさせる。その後新しい事実が判明し、また謝罪させようとする。そうしているうちに、子どもも保護者も不信感を持つようになる。謝罪させることが第一ではない。子どもが事実をすべて話すことが大事なのである。二人一緒に話を聞こうとしても、子どもは正直に話をしないことが多い。その後別々に聞こうとしても、すでに機を逸している。子どもが自らの行いを反省し、成長する機会を逸してしまう。そんな場面を多く見るようになった。

生徒指導に限らず、山さんはまだまだ現場に数多くいる。その先生の持つ職人技をきちんと後世に引き継いでいかなければいけない。